

専攻科における介護実習Ⅰの現状と課題

～学生のアンケート調査を通して～

森 永 牧 子

はじめに

昭和62年に社会福祉士及び介護福祉士法が制定され、20年が経過し、介護、福祉ニーズの多様化、高度化に対応し、人材の確保と資質の向上を図ることが必要となってきた。そのような社会の変化に対応するために、平成19年に社会福祉士及び介護福祉士法が改正された。介護福祉士養成課程においても、資格取得時の到達目標である「求められる介護福祉士像」（資料1）が打ち出され、さらに養成施設における「資格取得時の到達目標」（資料2）も明確化され、その目標到達に向けた新しい教育カリキュラム（新カリキュラム）が導入された。

新カリキュラムでは、介護を必要とする幅広い利用者に対する基本的な介護を提供できる力の修得を目指すという観点から、従来の教育内容を「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」の3領域に構成された。各領域では①介護の実践の基盤となる教養や倫理的態度の涵養に資する「人間と社会」②尊厳の保持、自立支援の考え方を踏まえ、生活を支えるための「介護」③多職種協働や適切な介護の提供に必要な根拠としての「こころとからだのしくみ」に教育内容が設定され、領域間の連携も新カリキュラムでの重要な位置づけとなっている。

介護実習に関しては、保育士資格取得者を対象とする一年課程の専攻科では、介護実習の実施時間数が360時間から210時間と大幅に減少した。（資料3. 本学専攻科の新・旧カリキュラム対象表）

介護実習の実施方法については、学生の学習段階に応じた1段階、2段階等の実習構成がなされていた。今回改正において介護福祉士の専門性を

向上させる目的から、介護実習Ⅰ、介護実習Ⅱの構成となった。これまでごく限られた施設や事業所のみで行われていたものが、養成施設の教育目標に応じた幅広い領域の施設や事業所での実習が加わるなど変化した。実習の枠組みの改正の背景として、介護保険制度の施行に伴い、従来の施設入所型の介護サービスから利用者の生活の場である地域での介護サービスへの転換がすすめられ、また、従来の介護施設においても、ユニットケアなどの個々の生活リズムを尊重した個別ケアの普及が進んでいること、さらに、認知症等の介護ニーズにより細やかな対応が可能な介護サービスとして、小規模多機能居宅サービスが創設されている。それらの新しいサービスを利用しながら、これからの社会では、障がいの有無や年齢に関わらず、個人が尊厳をもった暮らしを確保することが重要であり、介護サービスにおいては、利用者一人ひとりの個性や生活のリズムを尊重した個別ケアの実践が必要とされている。

新カリキュラムでは、介護実習のねらいとして次の二点をあげている。介護実習Ⅰでは、利用者の生活の場である多様な介護現場において、様々な生活の場における個々の生活リズムや個性の理解、個別ケアの理解、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じたチームの一員としての介護福祉士の役割について理解する。介護実習Ⅱでは、利用者の課題を明確にするための利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を総合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得する学習とすることである。

ねらいを達成するための具体的な実習方法として、介護実習Ⅰでは利用者の生活の場である多様な介護現場において、利用者の理解を中心とし、これに併せて利用者・家族との関わりを通じたコミュニケーションの実践、他職種協働の実践、介護技術の確認を行うことに重点を置いた実習施設・事業所での実習である。その実習施設の基準としては、利用者の暮らしや

住まい等の日常生活の理解や多様な介護サービスの理解を行うことができるよう、利用者の生活の場として、小規模多機能居宅介護事業、認知症対応型高齢者共同生活援助事業等を始めとして、居宅サービスを中心とする多様な介護現場とし、介護保険法その他の関係法令に基づく職員の配置に係る要件を満たすものであるとされた。介護実習全体のなかである限られた領域に片寄ることのないよう、短期間であっても、小規模多機能居宅介護事業、認知症対応型高齢者共同生活援助事業等を始めとして、居宅サービスを中心とする多様な介護現場において個別ケアを体験・学習できるように配慮することとされている。

本学専攻科福祉専攻においては、次の表1のように新カリキュラムに対応した介護実習Ⅰを昨年より実施している。

表1 専攻科における介護実習Ⅰの概要

	実施施設	対象施設	期間	時期
介護実習Ⅰ-1	入所施設（大規模な施設）	介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、障害者自立支援施設、重症心身障害児施設、肢体不自由児施設など	3日	5月下旬
介護実習Ⅰ-2	入所施設 デイサービス（小規模な施設）	グループホーム、小規模多機能施設、デイサービスなど	2日	5月下旬
介護実習Ⅰ-3	訪問介護	居宅介護事業所など	2日	夏季休暇中

1. 研究の目的

本学専攻科においても、昨年より新カリキュラムでの教育を実施している。介護実習では、介護実習Ⅰという新しい括りができ、2日から3日という短期間ではあるが、グループホームをはじめとする小規模な実習施設・事業所での実習が可能となり、実習の幅が広がり、学生への実習効果も大いに期待するものであった。しかしながら、新カリキュラム一期生の実習後のアンケート調査結果では、介護実習Ⅰにおける小規模施設（グループ

ホーム等)の実習が良かったと答えた学生は予想よりも少ない25.9%と4分の1程度であった。

介護実習は、学内で学んだ知識や技術を実践する場であるとともに、利用者や実習指導者と出会い、向きあい、人間的な関わりを深めることにより、学生は介護に対する考え方、価値観、就職を決定するときの判断材料など短期大学での学びでは得ることが出来ないことを学ぶことができる重要な場である。限られた実習時間のなかで、よりよい介護実習Ⅰの方法を探るために、介護実習Ⅰの各実習での印象や、達成感と介護職に対する意識に関するアンケート調査を昨年より内容を詳細なものとし、実習前と実習後の学生の変化を検証し、介護実習Ⅰの効果と今後の課題について考察する。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象者：2010年度入学の本学専攻科福祉専攻の学生33名
2. 調査内容：「介護職に対する意識についてのアンケート」と「介護実習Ⅰの振り返りのアンケート」の2種類のアンケート調査を行った。

「介護職に対する意識についてのアンケート」の質問項目は、12項目を、「思わない」から「強く思う」の5件法での回答形式と「実習において利用者の生活支援を行ううえで配慮しなければならないと思うこと」という自由記述の質問項目の3項目で構成した。

「介護実習Ⅰの振り返りについて」のアンケート調査では、実習をどのように受け止めていたかについて、実習に対しての印象と達成感の観点から10の設問を設定した。

アンケートの質問項目等は先行研究を参考にして作成した。

3. 調査期間：実習に行く前の2010年5月の介護総合演習の時間に「介護職に対する意識」のアンケート調査を実施。介護実習Ⅰがすべて終了した2010年9月の介護総合演習の時間に「介護職に対する意識」と「介護実習Ⅰの振り返りについて」のアンケート調査を実施した。

4. 倫理的配慮：調査が自由意志によるものであり拒否することが可能であり、個人を特定するものではなく、結果は本研究目的以外には使用しないことを口頭で確約している。

Ⅲ. 研究結果

1. 学生の概要

学生33名のうち、男性6名（18.2%）、女性27名（81.2%）で、年齢は、20歳が26名（78.8%）、21歳が3名（9.1%）、22歳以上が4名（12.1%）であった。

2. 介護職に対する意識に関するアンケートの結果

介護職に対する意識は、実習前も実習後も「高齢者や障害者に関心がある」「福祉や介護に関心がある」「介護職は人の役に立つ仕事だと思う」「介護職はやりがいのある仕事だと思う」「介護は将来性のあるしごとである」「介護職は誇りを持てる仕事だと思う」の項目の平均値は4.67から3.92、最頻値は4以上であった。「介護は社会的に評価されている」「介護の仕事は医師に従属する仕事だと思う」「介護の仕事は看護師に従属する仕事だと思う」の質問の平均値は2.56から2.92、最頻値は3から2であった。「兄弟姉妹や友人に介護職を勧めたいと思う」「就職は介護職を希望する」「介護職は長く続けたいと思う」の質問の平均値は2.91から3.52、最頻値は3から4であった。

学生は高齢者や障害者に関心があり、福祉や介護に関心を持っており、介護職を人の役に立つ、やりがい、将来性のある仕事であると思っている。医師や看護師に従属する仕事であると思っている学生は少ないが、2割ほどの学生は医師や看護師に従属する仕事であると思うと答えている。「介護職の社会的な評価を高い」と思っている学生は2割程度で、実習前は20%、実習後でも27%である。「就職は介護職を希望する」の項目では、「就職は介護職を希望する」学生は実習後では24.2%となり、実習後に介護職の就職を希望する学生が増加している。

図1に示すように、実習の前後の学生の介護職に対する意識の変化についての分析では、「学生の介護職に対する意識」の12項目の質問項目では、「高齢者や障がい者に関心がある」と「就職は介護職を希望する」は実習の前後で変化なかった。それ以外についての項目では、最頻値は変わらないが、平均値は上がっていた。実習により介護職に対する意識には、変化が見られたといえる。次に「高齢者や障害者に関心がある」「介護職は人の役に立つ仕事である」「介護職は社会的に評価されている」「就職は介護職を希望する」の4つの項目について実習前と実習後の意識の変化について述べる。

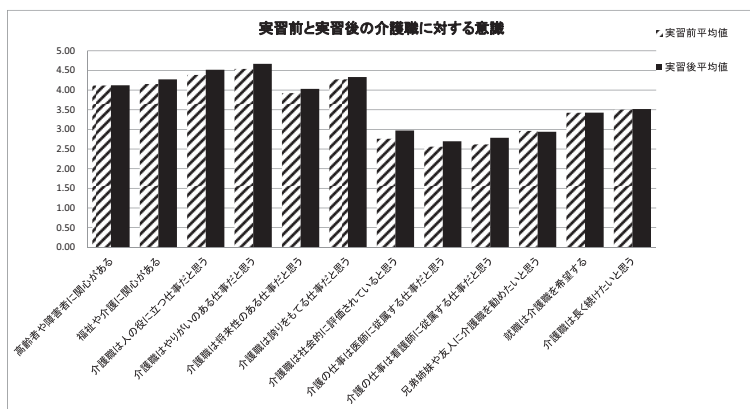


図1 実習前と実習後の介護職に対する意識

(1) 「高齢者や障がい者に関心がある」

図2に示すように、「高齢者や障がい者に関心がある」の項目では、平均値は、実習前も実習後も4.12、最頻値も4点と同じであったが、その内訳をグラフに表示すると、実習前に「やや思う」と答えていた学生が73.1%であったが、実習後では45.5%となり減少した。27.6%の学生は、「思う」と高齢者や障がい者への関心を深めた者と「ふつう」と逆に高齢者や障がい者への関心が薄れてしまった者とに別れていることがわかる。

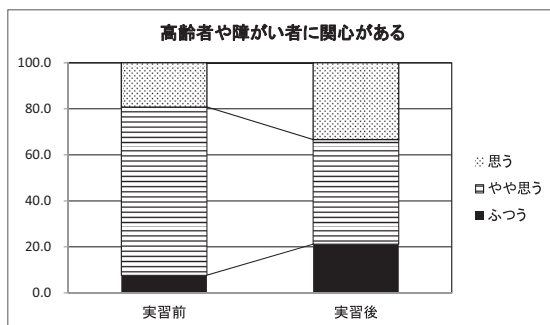


図2 高齢者や障がい者に関心がある

(2) 介護職は人の役に立つ仕事である

図3で示すように、「介護職は人の役に立つ仕事だと思う」については「思わない」「あまり思わない」という学生が実習後には0となっており、「やや思う」と答えていた学生も減少し、「思う」と答えた学生が2割ほど増えている。

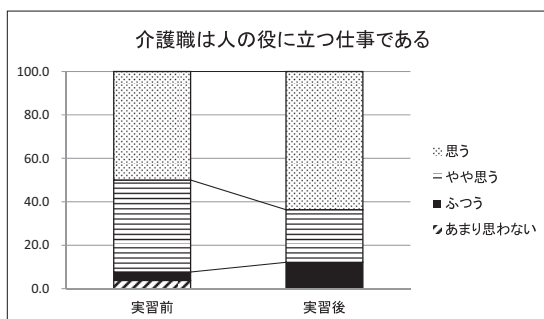


図3 介護職は人の役に立つ仕事である

(3) 介護職は社会的に評価されている

介護職の社会的評価については、実習前は「ふつう」「あまり思わない」学生が64%いた。

「思う」「やや思う」と評価されていると思う学生は実習前20.0%から実習後27.3%と7%増えている。また、「思わない」「あまり思わない」と評価されていないと思う学生は、実習前36.0%から実習後39.4%と3.4%増えた。「社会的に評価されている」と考えている学生が実習後に増えているが、実習後においても「社会的に評価されている」と思う学生は3割程度である。

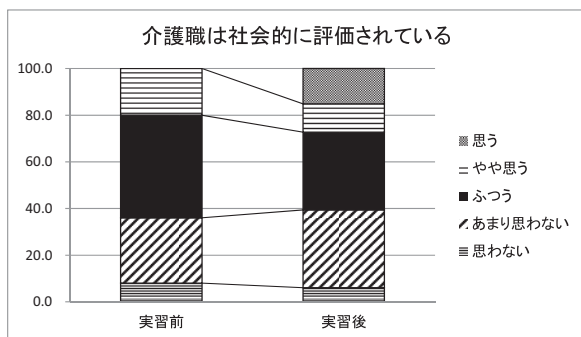


図4 介護職は社会的に評価されている

(4) 就職は介護職を希望する

図5に示すように、「就職は介護職を希望する」に対し、平均値、最頻値では変化が見られなかったが、内訳を分析すると学生の就職に対しての意識は実習前後で変化がみられた。実習前「思う」と答えた学生は7.7%であり、「思わない」と答えた学生はいなかった。実習後では、「思う」と答えた学生は24.2%、「思わない」は9.1%となり、「思う」「思わない」ともに増加している。学生は就職に対しての意識を、実習を通してはっきりとさせている。

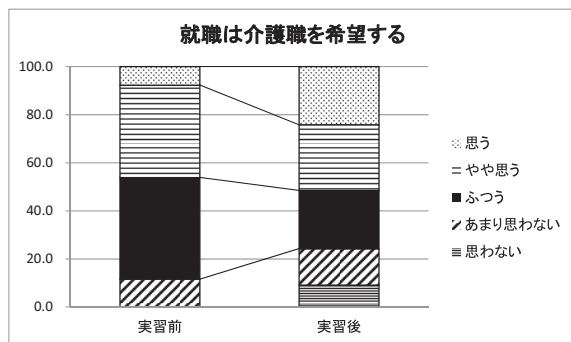


図5 就職は介護を希望する

3. 介護実習Ⅰの振り返りのアンケート調査結果

(1) 入学の目的と実習の目的の理解

「入学の目的」の問いには、介護福祉士資格取得と答えた学生が93.9%でほとんどの学生が介護福祉士資格習得を目的に入学してきている。

「介護実習の目的の理解について」では、96.9%の学生が実習の目的を理解していると答えている。ほとんどの学生は介護福祉士資格習得を目的として入学し、実習の目的の理解についても理解して実習に臨んでいることがわかる。

(2) 介護実習Ⅰのどの実習の印象が良かったか

先に述べたように、本学の介護実習Ⅰは施設の種類に応じて3回に分けて実施している。図6に示すように、「介護実習Ⅰ－1の大規模の入所施設（特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、障害者自立支援施設、重症心身障害児施設、肢体不自由児施設などで実施）」が良かったと答えた学生は6.5%、「介護実習Ⅰ－2（グループホーム、小規模多機能施設、通所介護等の小規模な施設で実施）」が良かったと答えた学生は48.4%、「介護実習Ⅰ－3（訪問介護）」が良かったと答えた学生は45.2%であった。「介

「介護実習Ⅰ－２，３」を８割の学生が良かったと答えており、「介護実習Ⅰ－２，３」の良かった理由の自由記述では、「グループホームが、ゆっくり一人一人に関わっていたから」「利用者さんとの関わりがよくとれたので」「施設とは違うアットホームな雰囲気を感じたから」「職員さんが丁寧で優しかった」「利用者の方とたくさんコミュニケーションを取ることが出来た」「ヘルパーさんから色々優しく丁寧に指導いただいたから」等があげられており、大規模な施設より小規模な施設や訪問介護の方が、利用者、実習指導者ともに距離が近く、コミュニケーションが取りやすかったことが、あげられており、学生の実習の印象を左右するのは、利用者、実習指導者との人間的な関わり、コミュニケーションの取り易さであることが伺える。さらに「介護実習Ⅰ－１」の良かった理由の自由記述に、「指導者が声をかけてくれて色々な見学実習をすることが出来た」という記述があり、実習指導者が「介護実習Ⅰ－１」の目的を理解し指導をしてくださったことにより、学生は大規模施設のなかでの様々な体験をすることができている。

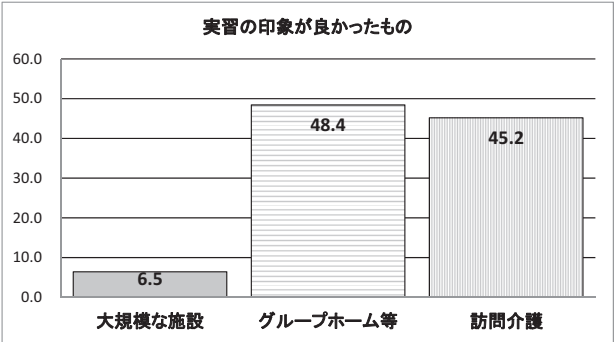


図6 実習の印象がよかったもの

(3) 利用者との関わりについて

「利用者との関わりが楽しかった」と、答えた学生は、87.1%であった。

その理由としては以下の内容が挙がっていた。

- ・祖母を思い出して、色々な経験を聞いて。
 - ・人生のセンパイのお話を沢山聞ける、どうすれば良いのかと考える事じたい楽しい。
 - ・高齢者の穏やかで温かい存在に癒しを感じた。
 - ・いろんな昔の話が聞けたから。
 - ・コミュニケーションがいっぱいとれたから。
 - ・コミュニケーション
 - ・教えてもらうことや、学ぶことが多くあったから。
 - ・おしゃべり楽しかった。
 - ・いろいろな話ができた。
 - ・人と会話することが好きだから。
 - ・親しみをもって皆さんも接して下さった。
 - ・普段話さない事が話せた。
 - ・一緒に話を共有したりするのが楽しかった。けど、待っているときは、辛かった。
 - ・一人一人の人生は違うのだと改めて感じたから。
 - ・お話がたくさんできた。
 - ・一人一人個性が色々あって楽しかった。
 - ・たくさんためになることを教えてもらったりたくさん話せた。
 - ・利用者とのコミュニケーションでたくさん学べた。
 - ・何かを作って完成したとき利用者の方がにこにことした笑顔をしてくれたから。
 - ・色々な人々とたくさんはなせてたのしかったから。
 - ・色々な話も出来たし、かわいがってもらった。
- などであった。

「苦痛だった」と答えた学生は11.8%でその理由としては、次のようなことを挙げている。

- ・コミュニケーションが難しい。
 - ・コミュニケーションがうまくとれなかったから。
 - ・話題が思いつかないから。
- などであった。

(4) 実習指導者との関わりについて

69.7%の学生は実習指導者との関わりが良かったと答えたが、27.3%の学生は実習指導者との関わりが苦痛であったと答えている。実習指導者との関わりが苦痛だった理由として、「気を使う」「何が言いたいのか分からない（指導者が）」「質問してもあいまいな答え方だったから」「指導者が指導者らしくない」等と答えている。「さらに実習の印象の問いの自由記述の結果からは、実習指導者との密な関わりが実習自体の印象を左右することが分かる。」

(5) 教員、実習生同士の関わり

教員との関わり、実習生同士の関わりについての印象は、どちらも9割の学生が良かったと答えている。

教員との関わりが良かった理由としては、「その時悩んでいることのアドバイスを頂ける上、ほっとする」「ぐちを聞いてもらった」「実習中に先生に会えると安心する」などがあげられていた。学生は実習という緊張した環境のなかで、教員と会い話すことで、実習そのものに対しての指導やアドバイスだけでなく、精神的な支えを求めている。このような思いを教員は受け止めながら、学生の緊張を解き、良い状態で実習できるように指導することが、実習の目標達成につながる。

実習生同士の関わりが良かった理由としては、「協力しあえた」「励ましあって頑張ることができた」「情報交換」「一人じゃなく安心できたから」「レクリエーションなど、一緒に考える場ができた」などがあげられていた。

(6) 実習に対する達成感

図7に示すように、実習に対する達成感は、平均値は3.3、最頻値4であり、不満足3.0%、やや不満足18.2%、どちらでもない27.3%、やや満足48.5%、満足3.0%であった。やや満足と答えた学生が50.6%と半数であったが、どちらでもないと答えた学生が26.5%と、半数の学生が満足感を感じていない状況である。理由には、「技術面ができなかった」「思うように動けない」「積極的になれない」「日程が短い」などが挙げられていた。

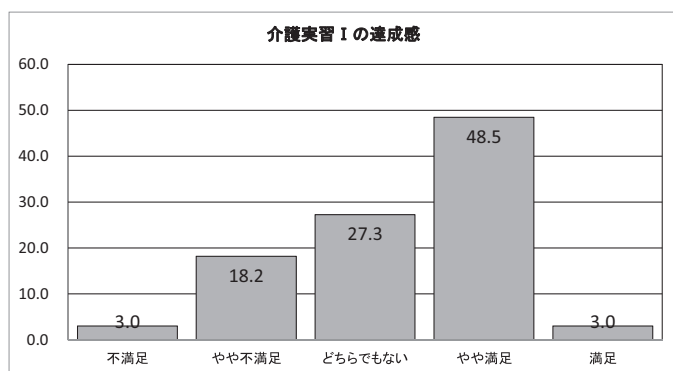


図7 介護実習Ⅰの達成感

(7) 実習全般に対する要望

実習全般に対する要望は自由記述で、次のようなことが挙げられていた。

- ・日数が少ないように感じます。グループホームの実習はもう少し多くても感じました。
- ・日程が短く、馴染み始めた頃に実習が終わるのは辛い。
- ・実習先が遠かった。
- ・もっと実習したい、色々な施設をみたい。
- ・Y施設はあまり楽しくなかった。

などであった。

(8) 卒業後の活動

図8に示すように、卒業後の活動については、介護福祉士として働くものは、51.5%、介護以外の仕事をする42.4%、無記入6.1%であった。介護福祉士として働く学生が5割であるのは少ないように思われるが、保育士資格を取得している専攻科の学生では、昨年の卒業生の進路実績と比較しても5割という数値は例年とほぼ同じである。

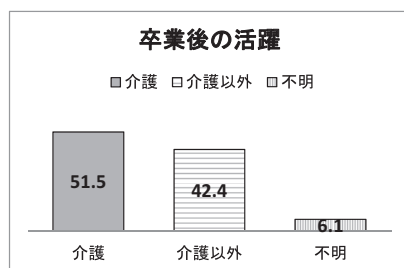


図8 卒業後の活躍

さらに、介護実習の印象や達成感が卒業後の進路に影響しているのかについて相関をみたが、「実習指導者との関わり（実習指導者との関わりが苦痛であった）」「実習の達成感」と「卒業後の活動（介護職以外の仕事を希望する）」の間には相関はみられなかった。このことから学生は、実習の印象や達成感だけで進路を決定しているのではないと言える。さらに、前出の「介護職に対する意識の調査」のなかの「卒業後は介護職を希望する」の項目では、実習前と実習後では変化がみられたことと合わせて分析すると学生は卒業後の進路に関係なく、実習には前向きに取り組み実習の達成感も感じていることがわかる。

4. 介護職に対する意識の調査と実習の達成感の相関について

実習の達成感と実習前と実習後の介護職に対する意識を比較すると、「介護職はやりがいのある仕事である」「兄弟姉妹や友人に介護職を勧める」

「介護職は長く続けたいと思う」の3項目では、実習の達成感があった学生の得点が有意に高く、その他の項目については、有意差はないが、得点も低くなっている。介護実習での達成感が、介護職のやりがいを感じ、その思いが介護職への就職に繋がっている。

さらに、図9に示すように、卒業後の活動と介護職に対する意識の関係を実習後の平均値でみると、「介護職以外を希望する」学生は、「高齢者や障がい者に関心がある」「介護職は人の役に立つ仕事である」「介護職は将来性のある仕事である」「介護職は誇りを持てる仕事である」「介護職は社会的に評価されている」については平均値が「就職は介護職を希望する」学生より高い。「介護の仕事は医師に従属する仕事だと思う」「介護の仕事は看護師に従属する仕事だと思う」の項目も「介護職以外を希望する」学生の平均値は高くなっている。「介護以外の仕事を希望している」学生は、介護職に対して人の役に立つ、将来性がある、誇りのもてる仕事であり、社会的評価も高いと思っているが、医師や看護師に従属する仕事であると考えている学生の割合も高い。

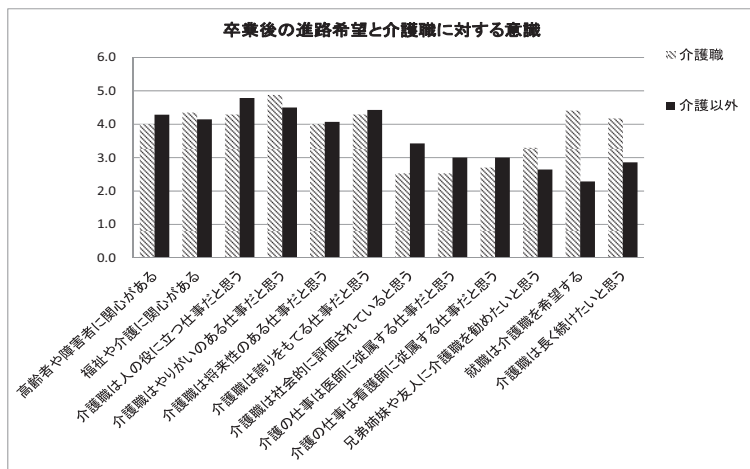


図9 卒業後の進路希望と介護職に対する意識

5. 利用者の生活支援を行ううえで大切だと思うこと

「介護職に対する意識」についてのアンケートの最後の項目である「実習において、利用者の生活支援を行ううえで配慮して介護しなければならないと思うことはどういうことですか。大切だと思う順に3項目挙げて下さい」という項目の自由記述についての分析を行った。(自由記述の詳細については表2参照)

実習前と実習後と全く同じことを記入した学生はいなかった。記述の形式を見てみると、実習前では、「教科書に書いてあるようなこと」「優しさ」「笑顔」など漠然としていた記述が多くみられるが、実習後の記述においては、「相手のやる気、苦しみを理解すること」「援助を行う所、見守る所を考える」「楽しくなってもらえるようにサービスの提供をする」といった具体的な記述が多くなっている。

記述の内容では、実習前も実習後も「利用者の立場に立って考える」「利用者の意志をくみ取る」など、利用者の意志を尊重することがあげられている。

その他のキーワードとして、内容をカテゴリー分類すると、多く挙げられたのは、実習前では、9人の学生が「安全への配慮、安心」を挙げ、次いで「生活歴」6人、「コミュニケーション」4人、「笑顔」3人となっている。実習後では、「コミュニケーション」を挙げる学生8人と増え、「必要なことのみ支援する、必要以上の介護はしない、利用者ができることはしないで見守りをする」4人など、自立支援に関することが具体的な言葉で出てきている。また、実習に多く挙げられた、「安全・安心」は6人、「生活歴」2人であった。実習後に新たに挙げたカテゴリーとして、「プライバシー」3人、「介護技術・技術的なもの・介護に関する知識」3人、「自分の感情・気持ち」2人などであった。さらに、「生活環境」や「施設は利用者の方の家と変わらない…」など様々な施設や事業所での実習を行ったことで、多様な利用者の生活の場についての理解を深め、介護の視点の広がりを感ぜさせる記述もあった。

表2 利用者の生活支援を行ううえで大切だと思うこと

利用者の生活支援を行ううえで大切だと思うこと（自由記述）

(実習前)		
安全・危険	利用者の方に向けた介護	コミュニケーション
相手に対する尊敬と愛情を持って関わる	相手の状況に対する理解、知識を持って関わる	相手の生活が過去からの連続性の上に成り立っている事を感じ、生活支援を行う。
笑顔	敬語	あいさつ
利用者の気持ちはどうなのか、意志	どの様な点に注意しているのかと、それが何故なのか(自分で立ててもらう、スポンを引き上げる)	今までの生活習慣と生活歴を知ること
利用者の気持ちをできるだけ尊重する	一対一の関係	自立支援
個人を尊重する	明るく、楽しく、元氣よく、そして温かく	プライバシー
相手の気持ちを尊重すること	危険の予想	その方の生活歴
利用者の残り少ない人生と一緒に過ごす	プライバシーの保護	自立を支援する
相手のことを知る	意志の尊重	気持ちを考える
相手の立場にたって考える	身体や精神面に配慮した援助を行う	コミュニケーション
利用者の考えや気持ちを尊重する	利用者の安全に配慮する	職員同士のチームワークに配慮する
コミュニケーション	生活歴	配慮
利用者ニーズ		
利用者の安全	利用者の気持ち	利用者の生活歴
安全・安心	優しさ	工夫
尊敬の心を持って接する	その人の経験やニーズの理解	利用者を想う気持ち
アイコンタクト	反復	笑顔
観察	心	注意力
いろんな所に目を配る	どんな時もその人の気持ちになろうとする気持ち	笑顔
教科書に書いてあるようなこと		
利用者の意見を尊重すること	じっくり観察する	コミュニケーション
利用者の表情、声色をよく見て生活支援をする	できることをやってもら(残存機能を生かす)	安全を考える
利用者の方の人生歴をしる	相手の性格など細かいところまで知る	相手の気持ちを大切ににする
利用者の思い、考え、意思	利用者に対する思いやり	笑顔で接する
本人の意思	安全、安心	声かけ
利用者の意思を尊重する	やりたいことをできるだけできるように工夫する	安全の配慮
利用者の意思をくみとり、信頼を得る	安全確保	楽しむ
利用者の意見を聴き、何を求めているのか		
言葉かけ		

(実習後)		
安全・安心	ことばかけ	利用者が「良かった」と思えるような、姿勢、対応
相手のやる気、苦しみを理解する事	安楽な姿勢や生活の中での安楽な行動、移動	生活環境が住みやすくなるような調整
共感する。利用者の気持ちを尊重する。	その人の背景を知り、尊敬の心を持つ。	技術的な物を身につけ、正しく介助する。
プライバシーの保護	価値観を知り尊重する。	QOLに配慮する。
プライバシー。自分がされて嫌なことはしない。	施設は利用者の方の家と変わらない面もあるから、利用者が生活する妨げにならない。	利用者が生活する上で必要なことのみ、支援すること。
生き様を知り、それに合わせた対応をしていくこと。	ニーズに答える。	楽しくなってもらえるようにサービスの提供をする。
相手の目標に立って物事を考える。	援助を行う所、見守る所を考える。	コミュニケーション
相手の気持ちを考えること。	苦のない日常生活を支援する。	やさしさ、思いやり、ぬくもり。
その人自身の意見の尊重	安全性	楽しさ(利用者の)
利用者のプライバシー	信頼	言葉掛け
利用者の方一人一人の気持ち	安全	コミュニケーション
利用者の安全	利用者の欲求に応えること	利用者一人ひとりにあった生活支援
相手のことを考える	自分の感情に左右されない	思いやり
その利用者の状況や過去の理解と把握。	介護技術の安定	介護に関する知識、おもいやり
利用者の方の尊重	意見の尊重	コミュニケーション
安全	コミュニケーション	観察
相手の気持ちをできるだけわかってあげる	軽い気持ちでの発言を控える	相手との距離をちゃんと考える
利用者の意見を尊重すること	明るく元氣な声で	コミュニケーションを楽しむこと。
生活支援だから利用者ができることはしないで見守りをする	傾聴	コミュニケーションを園る(雑談)
利用者さんの気持ち	施設での決まり	自分の気持ち
利用者の安心、安全	コミュニケーション	優しさ、思いやり
利用者の気持ちをくみとる	利用者に負荷がかからないようにする	必要以上の介護はしない
利用者の生活リズム、習慣		

減ったキーワードとして「安全・安心」が9人から6人、「生活歴」が6人から2人などがある。これは、短期間の実習であり利用者とのコミュニケーション中心の実習であり、技術的な支援等まで実習の深まりがなかったために、安全・安楽といったところにはまでは関心が向かなかったことが伺える。しかしながら、様々な視点から自分なりに利用者の生活支援の際に大切にしたいもの、介護をするうえで忘れてはならないことを把握している。

Ⅳ. 考察・まとめ

今回のアンケート調査により、2日間、3日間と期間は短い実習ではあったが、学生と利用者との関わりや、利用者と施設職員との関わりを通して、コミュニケーションの大切さや自立支援の重要性を学ぶことが出来ていること、さらに、多様な介護現場において、個々の生活の場を理解し、多様な利用者との人間的な関わりと、そこで行われている個別ケアの体験から、今まで漠然と描いていた利用者への思いや、介護に対しての思考を明確化させることができたことが分かった。これは、介護福祉士養成教育の大きな目的である、「介護に対する考え方、価値観、介護福祉士としての考え方を学ぶこと」などに関して、ある程度目的を達成したことを意味している。しかしながら、実習の達成感の問いに対して、約半数の学生が実習の達成感を感じていないこと、実習指導者との関わりにおいて、約3割の学生が苦痛を感じていること、さらには、介護職に対して魅力を感じながらも、介護職には就かないという矛盾点や課題も明らかになった。

実習の達成感を感じられない要因として、2、3日間という実習期間の短さの問題と、入学して2か月で実習を行う、時期の問題があると考えられる。期間の短さの問題では、利用者や職員との関係が形成されつつあるところで、実習が終了してしまい利用者との関わりが中途半端になることが、学生にとっては達成感が感じられないのではないかと思われる。

時期の問題として、入学後間もない5月下旬、介護の知識や技術が身に

ついていないままの状態で実習を行っていることも影響しているのではないかと思われる。保育士資格がベースにある専攻科の学生は、短期大学において保育実習を経験していることで、知識や技術の不足を補っており、全く実習に行けないなど大きな問題とはならないが、介護の知識や技術を身につけていないことが、学生にとっては不安や自信喪失につながるのではないかと推測される。また、介護現場において、知識や技術を習得していないことから、実習内容に関して制限されてくることが多く、実習の幅が狭く、コミュニケーションのみの実習になりがちである。学生は高齢者の生きた時代背景などの理解に乏しく、何を話して良いか分からない、話題が見つからないなど、利用者との関わりを楽しさを見出すことができない学生もいるのではないかと思われる。その結果、実習の達成感を感じられないことに影響していると思われる。時期と期間の変更は一年間の養成課程のなかで大幅に行うことは難しい。同時期と同期間の実習でも学生が実習での達成感を感じることができ、介護実習Ⅰのための授業の展開を行い学生が自信を持って実習に臨める環境を作る必要がある。

また、今回の実習についてのカリキュラムの変更点の一つに、実習指導者の位置づけがある。介護実習Ⅱでは、実習指導者研修課程を修了した者のみ実習指導者として学生指導を行うのに対し、介護実習Ⅰにおいて実習指導者の資格要件は、介護福祉士の資格を有する者又は3年以上介護業務に従事した経験のある者とし、要件が緩和されている。教員の巡回体制についても、巡回指導に係る基準が緩和され、週2回以上の巡回から週1回以上の巡回となった。特に実習期間が1日から3日程度の実習においては、実習期間前に養成施設と実習施設・事業所の実習指導者との間で情報交換を行い、実習に係る教育の到達目標を共有している場合には、週1回の巡回を行わずとも差し支えないことになった。実習指導者の資格要件が緩和されたことにより、本来の介護実習Ⅰの目的を理解しないまま学生を指導しているのではなかろうか。教員も短い期間の実習であれ、実習巡回を実施し、学生と現場との連絡調整を行わなければ効果的な実習が行うことが

できないのではないだろうか。実習指導者と教員とのより良い関係が構築されていることにより、施設や実習指導者に親しみや信頼感を持つことで、その場の実習により良い効果を与えるのではないかという思いから、専攻科においては、実習施設の指導者が「介護過程」の非常勤講師として、実習以外の場で学生と関わっている。そのことにより、相互理解を深め、非常勤講師として大学に來ている実習指導者のいる施設での実習は学生が質問もしやすく、学生の個性に合わせた指導も行うことができています。このように、実習指導者と学生が理解を深め、実習指導者と教員のよりよい信頼関係を築くことが、学生にとっての実習環境を整え、効果的な介護実習を期待できる。

今回、介護実習Ⅰについての振り返りを、実習前後の「介護職に対する意識」と実習の印象を中心とした「介護実習Ⅰの振り返り」のアンケート調査から分析したが、今回の調査では、介護実習Ⅰの学習のねらいである、「生活の場である多様な介護現場において、様々な生活の場における個々の生活リズムや個性を理解した上で、個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーション実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じたチームの一員としての介護福祉士の役割について理解すること」についての振り返りを分析することができなかった。介護実習Ⅰの効果測定のためには、より具体的な内容の調査が必要であった。

「介護職に対する意識」や「実習の振り返り」で、介護実習の学びを確認するとともに、具体的に介護実習Ⅰの達成度を検証していくことにより、効果的な介護実習Ⅰのあり方を明らかにしていくことが今後の課題である。

謝辞

この研究にあたり、アンケート調査に協力していただきました本学専攻科福祉専攻の学生に深く感謝いたします。

参考文献

- 1) 九州大谷短期大学専攻科福祉専攻 (2010) 介護実習マニュアル
- 2) 介護福祉士養成講座編集委員会編 (2009) 「新・介護福祉士養成講座
10介護総合演習・介護実習」
- 3) 川延宗之編 (2008) 「介護教育方法論」
- 4) 日本介護福祉士会編 (2004) 「現場に役立つ介護福祉士実習の手引き
－指導者・教員共通－」
- 5) 足立恵子「介護実習に関する学生の評価：アンケート調査から（丸
山宣武教授退休m o 記念号）」聖母女学院短期大学研究紀要37, 70－
81, 2008

資料1

求められる介護福祉士像

1. 尊厳を支えるケアの実践
2. 現場で必要とされる実践的能力
3. 自立支援を重視し、これからの介護ニーズ、政策にも対応できる
4. 施設・地域（在宅）を通じた汎用性ある能力
5. 心理的・社会的支援の重視
6. 予防からリハビリテーション、看取りまで、利用者の状態の変化に対応できる
7. 多職種協働によるチームケア
8. 一人でも基本的な対応ができる
9. 「個別ケア」の実践
10. 利用者・家族、チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力
11. 関連領域の基本的な理解
12. 高い倫理性の保持

資料2

資格取得時の到達目標

1. 他者に共感でき、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につける
2. あらゆる介護場面に共通する基礎的な介護の知識・技術を習得する
3. 介護実践の根拠を理解する
4. 介護を必要とする人の潜在能力を引き出し、活用・発揮させることの意義について理解できる
5. 利用者本位のサービスを提供するため、多職種協働によるチームアプローチの必要性を理解できる
6. 介護に関する社会保障の制度、施策についての基本的理解ができる
7. 他の職種の役割を理解し、チームに参画する能力を養う
8. 利用者ができるだけなじみのある環境で日常的な生活が送れるよう、利用者ひとりひとりの生活している状態を的確に把握し、自立支援に資するサービスを総合的、計画的に提供できる能力を身につける
9. 円滑なコミュニケーションの取り方の基本を身につける
10. 的確な記録・記述の方法を身につける
11. 人権擁護の視点、職業倫理を身につける

引用：厚生労働省 「介護福祉士養成における教育内容等の見直し」 P. 6

資料3

本学専攻科における旧・新カリキュラム対象表

旧カリキュラム

	科目名	時間
法定必修科目	老人福祉論	60
	リハビリテーション論	30
	レクリエーション活動援助法	30
	老人障害者の心理	30
	家政学概論	30
	家政学実習	90
	介護概論	60
	介護技術	120
	形態別介護技術	120
	介護実習	360
	介護実習指導	30
	小計	960
選択科目	障害者福祉論	30
	保健学Ⅰ	30
	保健学Ⅱ	30
	人間学	30
	対人援助論Ⅰ	30
	対人援助論Ⅱ	30
	福祉研究Ⅰ	30
	福祉研究Ⅱ	30
	小計	240
	合計	1200

新カリキュラム

領域	科目	時間
人間と社会	社会の理解	30
	小計	30
介護	介護の基本	180
	コミュニケーション技術	60
	生活支援技術	300
	介護過程	150
	介護総合演習	60
	介護実習	216
	小計	966
こころとからだのしくみ	発達と老化の理解	30
	認知症の理解	60
	障害の理解	30
	こころとからだのしくみ	60
	小計	180
	合計	1176

実習に関するアンケート①

次の質問項目に、「思わない」「あまり思わない」「ふつう」「思う」「強く思う」の5段階で回答をしてください

思わない：0	あまり思わない：1
普通：2	思う：3
強く思う：4	

思わない	あまり思わない	ふつう	思う	強く思う
------	---------	-----	----	------

1 高齢者や障がい者に関心がある	0	1	2	3	4
2 福祉や介護に関心がある	0	1	2	3	4
3 介護職は人の役に立つ仕事だと思う	0	1	2	3	4
4 介護職はやりがいのある仕事だと思う	0	1	2	3	4
5 介護職は将来性のある仕事だと思う	0	1	2	3	4
6 介護職は誇りをもてる仕事だと思う	0	1	2	3	4
7 介護職は社会的に評価されていると思う	0	1	2	3	4
8 介護の仕事は医師に従属する仕事だと思う	0	1	2	3	4
9 介護の仕事は看護師に従属する仕事だと思う	0	1	2	3	4
10 兄弟姉妹や友人に介護職を勧めたいと思う	0	1	2	3	4
11 就職は介護職を希望する	0	1	2	3	4
12 介護職は長く続けたいと思う	0	1	2	3	4

あなたは実習で利用者の生活支援を行ううえで配慮して介護しなければならないと思うことはどういうことですか。大切だと思う順に3項目挙げてください

- 1 _____
- 2 _____
- 3 _____

実習後アンケート②

実習についての質問です。該当するものに○をつけて、必要な箇所ではその理由を必ず書いてください。また、理由は具体的に書いてください

- 1 この学校へ入学した目的
() 介護福祉士の資格取得 () 他の学科を志望していた
() その他 ()
- 2 介護実習の目的の理解について
() 何のために実習するのかを知っている
() 何のために実習をするのか知らない
- 3 介護実習Ⅰの印象について
() 介護実習Ⅰ－１が一番よかった 理由 ()
() 介護実習Ⅰ－２が一番よかった 理由 ()
() 介護実習Ⅰ－３が一番よかった 理由 ()
- 4 介護実習Ⅰでの利用者とのかかわりについて
() 楽しかった 理由 ()
() 苦痛だった 理由 ()
- 5 介護実習Ⅰでの指導者とのかかわりについて
() よかった 理由 ()
() 苦痛だった 理由 ()
- 6 介護実習Ⅰでの教員とのかかわりについて
() よかった 理由 ()
() 苦痛だった 理由 ()
- 7 介護実習Ⅰでの実習生同士の交流について (同じ学校でも他校も含めて)
() よかった 理由 ()
() 苦痛だった 理由 ()
- 8 介護実習Ⅰでの達成感について
() 不満足 () やや不満足 () どちらでもない
() やや満足 () 満足
理由 ()
- 9 介護実習Ⅰ全般に対する要望について自由に記述してください

- 10 卒業後の活動について
() 介護福祉士として働く () 進学する
() 介護以外の仕事をする